

第9部会

進されたことである。三河龍溪院は、こうした幕臣グループの支援を受け、宗派や派閥を超越した僧侶たちによって支えられる寺院であつたと見ることができよう。こうした宗旨を異ならせる寺院や僧侶たちの事業推進は、特に注目に値する。それは、曹洞（黙照禅）・臨済（看話公案禅）・日本黄檗（文字禅）は、本来宗旨を異ならせるからにはかならないからである。

状況からすると、一緒に事業を進めた各宗派は、後にその宗旨に遵つて、行動を異ならせることが想像できる。

であれば、その各宗派が宗旨を超えるための理の所在を解明する必要があるが、それについては別に譲りたい。

近代ドイツ宗教思潮における仏教

——ベックを一事例として——

春 近 敬

ドイツ人ヘルマン・ベック (Hermann Beckh, 1875-1937)

はベルリン大学にてインド学を学び、カーリダーサの研究で哲学博士号を、チベット文法の研究で教授資格を取得したなど、当時のドイツの典型的な文献学者であつた。しかし一方で一九一一年、シュタイナーの講演を初めて聴き、人智学の思想に大いに傾倒する。第一次大戦後の一九二二年、人智学のキリスト観に基づいた宗教団体「キリスト者共同体」に、設立メンバーの一人として参加した。以降、一九三七年の死去まで同団体の

司祭として活動した。

ベックは、仏教は哲学的要素ではなく神秘的要素こそが核心であるとし、仏陀は哲学者ではなく、大乘仏教的な救済者であり、したがって南伝仏典よりも、神秘的・神話的要素の強い北伝仏典が仏教の本意を伝えているとした。このような仏教理解は、仏教とは哲学的なものであり、合理的に解釈可能であるとする当時のドイツの仏教研究の主流から大きく逸脱しており、今でも仏教研究史においても重く扱われていない。

このベックの仏教理解の背景には、シュタイナーの人智学の世界観が存在する。人智学では、人間は瞑想等による特定の修行を通して、「超感覚的領域」である高次の認識を獲得できると考える。シュタイナーは、この「超感覚的領域」の認識の上に立てば、精神や宗教、人類の問題を近代自然科学と同じ厳密さで探究できると主張した。一九一六年に書かれた主著『仏教』には、既に人智学の世界観の影響がみられる。一九二二年以降のベックは、キリスト者共同体司祭として人智学の世界観を全面に押し出した著作を多数発表するが、根本的な仏教理解では共通している。

この人智学の世界観の影響を受けていると考えられる仏教理解としては、以下の要素が挙げられる。①仏教は哲学的、思想的なものではなく、徹底して実践の行としてのヨーガである。

②仏伝などに見られる神秘的、幻想的な記述は文学的表現でも仏教の神話化でもなく、現に存在する「超感覚的領域」の世界の諸相を象徴的に表現したものである。③仏教はキリスト教に最終的に合流されるべき「生命の流れ」である。しかし、ここ

で言うキリスト教とは、これまでの「教會的」教理的」キリスト教ではないとする。

このように、ベックの仏教観は人智学の世界観の影響を強く受けたものであった。にもかかわらず、『仏教』は当時のドイツでは非常にポピュラーな仏教書となり、日本にも「ヨーロッパにおける仏教研究の最も代表的な名著」(岩波文庫版『仏教(上)』表紙)として紹介された。これは何を意味するのかわ。

世紀転換期のドイツでは、英仏に遅れ、かつ急激な近代化への抵抗感と社会的疲弊から「流浪する宗教性」とも言える様々な社会運動、宗教運動が発生した。そして、第一次大戦敗戦と帝国崩壊、その後のワイマール共和国の迷走は非合理的なるものを求める思潮の蔓延に拍車をかけた。一方、ドイツの仏教研究は、「合理的」な言語研究に基づく文献学的手法が主流であった。つまり、ベックは二重の意味で「ドイツ的」な位置に立たされていたのである。そして、ベックは仏教の神秘性に着目したが、少なくともベック自身は文献学者として振る舞い、自分が非合理主義に跪いたとは思わなかった。非合理的なものを求める当時のドイツ社会からの、そして大戦を経験したベック自身の内心からの要請に対して、ベックは「合理的」な理解の領域を、シュタイナーの言う「超感覚的領域」にまで拡大して説明を試みることで、科学的・学問的という手法を変えずに、こうした問題に答えようとしたのである。

その意味で、ベックの仏教理解は近代、とくに世紀転換期から一九二〇年代にかけてのドイツの宗教思潮上の仏教理解の特徴ある一事例と言える。

吉田兼好の死生観

新保 哲

中世鎌倉末期の隠遁者、歌人、随筆家というさまざまな顔を持つ人間通の魅力ある人物、吉田兼好法師の死生観について、彼の心の根底には如何なる問題の自覚・意識があったのか。そのことに関して考察し、明らかにしてみたい。

兼好には、仏道の修養を通じて、心の安心立命、常住平生の念を求める指向性の態度が窺われ、それは必ずしも宗派的色合いはみられない。たとえば、生死一番という一大事については、何よりもまず急ぎ心に掛けなければならない。願いごとを成就してから、暇を見いだして仏道修行をしようと思つたら、願いごとは果てるはずがない。そこであらゆる願いごとはみな妄想だと思い、直ちに一切を放擲して、仏道修行に専念する時、何の邪魔もなく、何の所作もいらず、心身ともに長く落ち着きを与えるというのである(『徒然草』第二百四十一段)。

兼好の仏道観の根底には、次のような死を間近に迎えようとする切迫した切実な精神的姿勢が窺い知られる。すなわちそれは第百三十七段にみえる。

兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ、身をも忘れる。世を背ける草の庵には、閑に水石をもてあそびて、是を余所に聞くと思へるは、いとかなし。しづかなる山の奥、無常のかたき競ひ来らざらんや。其死にの